AMDA News Letter

VoL.3 No.4
１９９０年6月１日

編集責任者　広田直敷
事務局　岡山市楢津３１０の１　菅波内科医院
（電話）０８６２－８４－７６７６

主要トピック

岡山とアジアをむすぶ医療を考える会発足
林原フォーラム（アジアの三大伝統医学）の報告書完成
マザーテレサ医薬品支援プロジェクト発足
AMDA/Bangladesh Regional Meeting開催
今井久美雄先生「朝日新聞声の欄」意見、三好彰先生河北新報に随筆

参考資料

岡山とアジアをむすぶ医療を考える会（会議資料）
AMDA/Bangladesh Regional Meeting開催報告
今井先生「朝日新聞声の欄」とお手紙、三好先生河北新報に随筆
AMDA/Japan国内総会案内

岡山とアジアの医療をむすぶ会発足

Health Care Network for Foreigners in Okayama

平成２年５月２７日（日）午後７時ー９時。レストラン：ムッシュベルク会議室にて。AMDA/JapanのRegional Coordinator広田直敷先生からの要請により「AMDA留学生医療ネットワーク」へ岡山市内開業医が参加していくことになりました。「岡山とアジアをむすぶ医療を考える会」Health Care Netwok for Foreigners in Okayamとして準備委員会が発足しました。８月頃から正式に活動開始予定です。それぞれの専門分野の１５くらいの医療機関の参加を考えています。 これにより医療ネットワークは現在の東京ー岡山ー沖縄をむすぶ線から、面への新しい局面を迎えることになりました。会員の先生方も複数の先生方と「地域ネットワーク」を結成して「面」としての展開にご協力いただけるようお願いします。方法論につきましては事務局までお問い合わせください。なお吉報として、私達の「AMDA留学生医療ネットワーク」に対して、検査センターからPrimary Careに必要な血液検査の無料化と薬品会社からEssenntial Drugの現物提供の可能性がでてきました。マスコミにも全国的に大きな反響があります。この「AMDA留学生医療ネットワーク」プロジェクトを今後も重点的に育成していく予定です。

林原フォーラム（アジアの三大伝統医学）報告書完成

平成１年８月第６回AMDA国際会議に先立って行なわれました中医学、アユルベーダ医学、ユナニ医学の「アジア三大伝統医学の現状と将来ー高齢化社会への対応」を討議した意義のある報告書（写真入り全２９８ページ）が完成しました。岡山大学医学部アジア伝統医学研究会は過去１５年間にわたって医療資源としての伝統医学の重要性に注目して調査を実施してきました。このフォーラムはこの実績に加えてAMDAのヒューマンネットワークを生かして林原フォーラムの支援を受けて実現したものです。アジアの保健健康水準の向上は現代医学だけでは不可能です。WHOが伝統医学の再評価を行なっている理由はここにあります。幸いにして私達にはこの三大医学の強力なHuman Resourcesがあります。岡山大学医学部留学中のDr.Krishna U.K.（アユルベーダ医師）の存在がその代表的な例です。Better Medicine for Better Future in Asiaの実現に向けてアジアの伝統医学を積極的に私達のプロジェクトに有効的に組み込んでいきたいものです。是非ご一読ください。なお、報告書の希望者は事務局までお申し込みください。価格は２０００円（送料込み）です。

マザーテレサ医薬品支援プロジェクト発足

平成２年３月岡山にて行なわれました執行部会で承認されましたマザーテレサのMissionaries of Charityへの医薬品援助プロジェクトがAMDA/IndiaとAMDA/JapanのJoint Projectとして正式に発足することになりました。会員の皆様の余分の手持ちの医薬品（抗生物質、ビタミン剤、止痢剤、翼状針、小児用針、ベビー用軟膏、バンドエイト等）を小林国際クリニックに送ってください。東京とカルカッタを往復しているシスターが直接マザーテレサの家に運びます。医薬品は欧米ものからで日本の民間団体のものは全くありません。カルカッタだけでなくフィリピンの施設への支援要請がありましたが、これについてはAMDA/Philippinesと協議します。今後の協力体制についてはAMDA全体の活動との関連の中で有効な方法を検討していきたく思っています。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

小林国際クリニックに協力病院

小林国際クリニックに心強い協力病院ができました。町田市（車で２０分）の町谷原病院（院長中西泉先生：昭和４７年慶応医卒、外科）です。東工大の留学生やラオス、ベトナムの方の受診があるとのことです。

（電話）０４２７－９５－１６６８（FAX)0427-96-2680

AMDA/Bangladesh ,Regional Meeting開催

日本在住バングラデッシュ出身の医師で構成されているAMDA/Bagladesh (Regional Cordinatorはナイーム先生：東大第２外科）が第１回の会議を開きました。Asisan Medical Networkへの参加等の決定がなされました。日本各地にメンバーの先生がおられます。AMDA/Japanの先生方との交流と相互理解をすすめたく思っています。会議内容は別紙資料にあります。

具体的な活動や行事がありましたら事務局あるいはナイーム先生に連絡をお願いします。（ナイーム先生への連絡電話：03-815-5411東大（内）第２外科医局）

今井久美雄先生「朝日新聞声の欄」に意見、三好彰先生河北新報に随筆

AMDAのメンバーになられた今井久美雄先生の「就学生達は日本人の本当の友人を求めている。心の優しさをみせれる身じかな友人になろう」という提案が６月４日（月）朝日新聞「声の欄」に掲載されました。

今井先生の人なりは別紙資料にて理解していただければと思います。

また、宮城／ブラジル友好協会事務局長をされている三好彰先生の河北新報への随筆を別紙資料にてお読みください。AMDA会員の多様性を理解していただけると思います。自分なりりアジアとの接点となる活動基盤を持ちながら他の会員との連携によりその活動範囲を広げていく、また相互支援によりレヴェルアップしてくのがAMDAを１０倍楽しむことかもしれません。会員の先生がたの自助努力に敬意を表しますとともに他の会員の先生がたにその楽しみを分けていただけるよう事務局からもお願いいたします。

（会議資料）

岡山とアジアをむすぶ医療を考える会

Health Care Network for Foreigners in Okayama

日時：１９９０年５月２７日（日）午後７時ー９時
場所：ムッシュベルク会議室（電話：５５－５５７５）
参加者：AMDA:Association of Medical Doctors for Asia
AMSA:Asian Medical Student's Association
岡山市内開業医
アジア人留学生（医師）
岡山市日中友好協会
国際医療協力専門家

（討議内容）

1）アジア医師連絡協議会（AMDA)「留学生医療ネットワーク」への参加協力要請
2）岡山とアジアをむすぶ医療を考える会準備委員会発足
　1）目的
　　1）医療の国際化にそなえてのデータベースづくり
　　2）プライマリケアーの保障
　　3）相互理解の促進
　2）実践目標
　　1）言語ボランティアネットワーク
　　1）アジア各国語ボランティアの確保
　　2）２４時間オンコール体制
　　3）維持費用の予算化
　　2）医療費のコストダウン化
　　1）検査（血液／尿／その他）
　　2）医薬品
　　3）その他
　　3）習慣／風俗の相互理解促進
　　4）参加医療機関の募集
　　5）関連団体／機関との連絡／協力関係促進
　　6）財政基盤の確立
　3）準備委員会
　　1）世話人会（出席者）
　　2）事務局（菅波内科医院）
　4）その他

当会加入医療機関に受診時医療費について

1）患者負担

1）国民保険加入者

自己負担分の６％は本人払い、２４％は当会が一時立て替え払い

2）保険未加入者

血液／尿検査およびEssenntial drugは無料　診察料の７０％本人払い、３０％は当会負担

3）民間保険加入者

保険換算相当料１０割

2）加入医療機関負担

1）国民保険加入者

２４％は当会へ寄付

2）保険未加入者　保険換算相当診察料の３０％を当会へ寄付

3）民間保険加入者　保険換算相当料３割を当会へ寄付

（補１）

加入医療機関の寄付でもって当会の運営財源にあてる

（補２）

外国人保険（AIU)

半年８０００円の掛け金で最高額１００万円までの疾病治療費保障

（補３）

医薬品の現物提供については医療の国際化に必要なデータベースづくりに使用

（補４）

血液検査の無料化についてはプライマリケアーに必要な範囲

1990年AMDA、Japan総会プログラム

6月23日（土）

1・はじめに(17:00-17:15)

(1)AMDA,Japan regional coordinator 挨拶－Dr. 廣田

(2)議長、書記の選出

2・1989年度活動報告（17:15-18:00)

(1)10thＡＭＳＣ記念シンポジウム－Dr. 遠田

(2)研修プログラムについて－Dr. 遠田

(3)ＡＭＤＡ,Summit の報告－Dr. 廣田

(4)会計報告－Dr. 廣田

3・1990年度活動方針案（18:00-19:30)

(1)執行部交代について－Dr. 廣田

(2)NEWS LETTER について－Dr. 菅波

(3)パソコン通信について－Dr. 高橋

(4)ＡＭＤＡ東京事務局設置について－Dr. 菅波

(5)７thＡＭＤＣについて－Dr. 廣田

(6)プロジェクト運営委員会（総論）－Dr. 国井

4・プロジェクト運営委員会

（各論･1）(19:30-20:30)

(1)在日外国人の医療問題について　－Dr. 小林

(2)医療ネットワークのガイドブック出版について－Dr. 小林

(3)マザーテレサの支援プログラム　－Dr. 小林

６月24日（日）

（各論・２）（9:00-10:00)

(3)フィリピン、トンドプロジェクト支援について－Dr. 遠田

(4)AMDA, タイ、バンコク診療所建設について　－Dr. 国井

(5)ANSAとの共同プロジェクト支援について－Dr. 国井

（バンコク保育所、AIDS予防プロジェクト）

(6)ポム君支援プロジェクトについて－Dr. 遠田

（在日ベトナム難民、秋田大学医学部学生）

５・報告(10:00-11:00)

－ＧＯのプロジェクトに参加して

(1)WHOポリオ根絶計画研修プロジェクト－Dr. 遠田

(2)JICA タイ公衆衛生プロジェクト－Dr. 川上

６・総括討論(11:00-12:00)

＊会議運営についての補足事項

１・食事の時間は特別に取ってありません。

（弁当を取りながら議事を進める予定です）

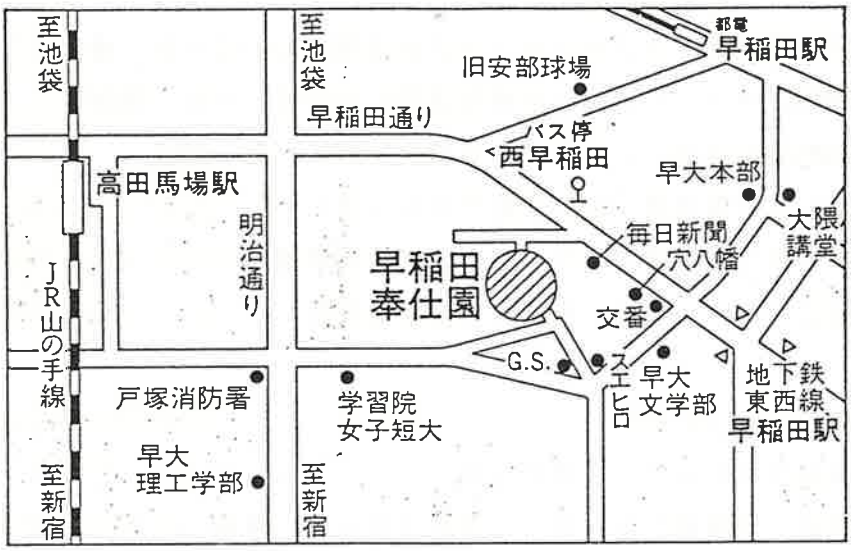
２・宿　泊：(1)早稲田奉仕園セミナーハウス

(2)戸山サンライズ（全国障害者福祉センター）

(1)、(2) で14人分予約してあります。宿泊の希望をもとに当日にお知らせします。６月17日現在６人しか宿泊の希望がありません。希望される方は早めにお知らせ下さい。料金は、宿泊人数にもよりますが、一泊4000～5000円程度の予定です。また、土曜日の夜遅く着かれる方は、早稲田奉仕園に泊まって頂きますが遅くとも11時には着くようにお願いします。

AMDA. Japan 総会 会場

宿泊 (1)



◆ＪＲ高田馬場駅より都バス早大正門行西早稲田下車３分

◆地下鉄東西線早稲田下車６分

◆駐車スペースは１台分のみ、有料です。御予約の時点で受付にご相談ください。

財団法人　早稲田奉仕園 セミナーハウス

TEL 03－205－5411

FAX 03－5273－0688

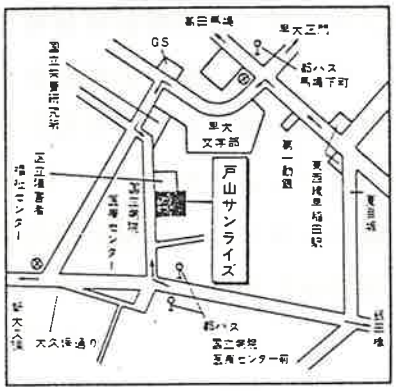
宿泊 (2)

戸山サンライズ

（全国身体障害者総合福祉センター）

〒162 東京都新宿区戸山１丁目22番１号

ＴＥＬ　03(204)3611代



○都バス　宿74・新宿駅西口ー東京女子医大行（医療センター経由）　国立病院 医療センター前下車100米

○都バス　宿63・山手線　新大久保駅 ― 新橋駅行

○　〃　〃　中央線　大久保駅

○地下鉄東西線　早稲田駅下車　徒歩８分

拝　啓

お電話ありがとうございました。一度、お便りを差し上げようと思いつつ時間がたってしまいました。申し訳ございません。

まず自己紹介からさせていただきます。私はいま、中原区にある富士通の川崎病院に勤めている内科の医師です。北里大学医学部卒業後、川崎市内の聖マリアンナ医科大学病院の第１内科で研修後、武蔵小杉の聖マリアンナ医科大学東横病院内科に勤務、その後、韓国ソウルの、延世大学セブランス病院予防医学教室保健大学院に留学し、修士過程を昨年の２月に卒業し日本に帰国しました。

私と韓国の最初の付き合いは、高校生のときに韓国の切手を集め始めたのがきっかけとなったと思います。釜山に住んでいる高校の先生と、かれこれ３年ぐらいの文通を通じて隣国韓国のことを教えてもらい、その時初めていつか韓国に行ってみたいと思うようになりました。そうして今から１５年ぐらい前になると思います。大学生のころ、夏休みに寝台車と連絡船を乗りついで釜山から慶州、ソウルと回ってきました。このときは前行程が７日間で４万円弱だったと思いますが、初めて見る韓国の光景に胸を躍らせた記憶があります。

帰国後、一人で韓国語を勉強していましたけれど、医学部の５年生のときに北里大学の内科に内視鏡の研修に見えた、釜山の尹先生という内科の先生との出会いによって韓国に対する夢がまた急激にふくらんできました。とにかく言葉を覚えなければ、韓国の人と話ができないと思い、新聞でやっと見つけた朝日カルチャーセンターと言うところに通い始めた次第です（医学部の５年次）。当時は韓国語なんか習うとなったら、それこそ変な目で見られていた時代でしたから、大変でした。

研修医も終わり、さてこれからというときに市内で産婦人科を開業していた父が、蜘蛛膜下出血で急死、残った建物を、韓国の留学生のためにと思い改造して寮にしました。当時は今のように、留学生、就学生の問題が余り深刻化していない時代でしたので、こちらのほうから寮に入って来る留学生を捜したものでした。この寮も、だんだんと大所帯になり、私が韓国に留学することになり、管理をする人がいなくなってしまうとのことで、一時閉鎖し、今はそっくり、他の会社に貸したままになっています。あの時に、誰か協力者がいたら、そのまま韓国人留学生会館としてやっていけたのかもわかりません。

さて、私の夢であった韓国での大学院生活も終え、日本に帰国してちょうど１年になりましたが、４年間の日本から離れていた生活のブランクも取り戻し、やっと、自分なりの余裕を見だすことができるようになりましたので何か私でもお手伝いができることがあったらと思っていたところ、ＮＨＫテレビで、高校時代の先輩の小林先生

のことを知った次第です。

今、私が切実に感じることは、真の日韓の友好とはなんであろうかという事です。口では簡単に「新しい日韓関係を」と言っていても、いざ本当に「民間レベル」で何ができるかを考えなければいけないと思います。ですから、今私がやろうとしていることは、簡単なことから、始めたいと思っています。就学生、留学生の健康管理といってもたいしたことではなく、彼らが、何か困った事があったり悩み事があったりしたときに、気軽に相談して欲しいというようなことなんです。というのは、言葉ができないということから病院に行くことが億劫になってしまい、病気が悪化して却って、辛い思いをするよりも、つまらない相談でもその中から、病気の兆候を見つけ出したり、また、精神的なストレスを取ってあげたりするだけでも彼らのためになるのではないかと思うからです。

私も韓国での生活を経験し、外国での生活の大変さというか（もちろん楽しさもありましたが）そう言ったものを肌で感じてきました。その、自分で感じてきて、こういったことをして欲しかったなあという部分での手伝いができればと思います。また、せっかくお手伝いをするのなら、長続きがするお手伝いができればと思っています。私の住んでいるところの近くには、今からもう２０年も前から韓国の人の歯を奉仕で治している歯科の先生がいます。「いやぁ、私のやっていることなんか、たいしたことじゃないですよ」とその先生はいつもおっしゃいますが、素晴らしいことだと敬服しています。

とりとめのないお話をしましたが、私の気持ちの少しでもおわかりいただけたかと思います。今月の下旬に東京での会があるとか聞きましたが、ぜひ一度お会いできればと思っております。

敬　具

１９９０年6月１１日

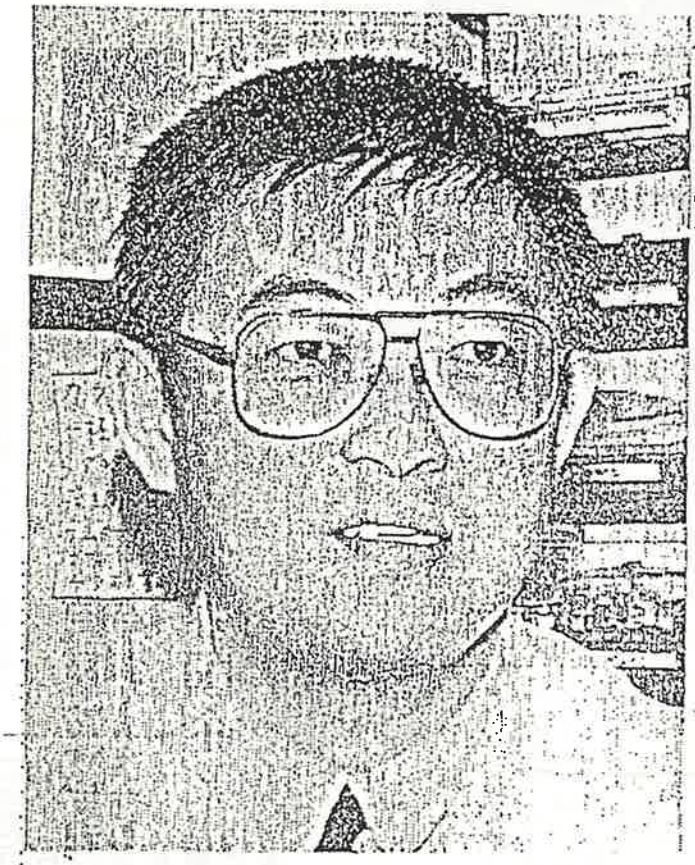
今井　久美雄

（久美雄の「お」は「男」ではなく「雄」です）

自宅　：川崎市幸区下平間８４－３　☎０４４－５１１－０７７７
勤務先：川崎市中原区上小田中１０１５
富士通川崎病院内科　☎０４４－７５４－２０５１

東洋経済日報

1989年6月30日刊



ひと

今井久美雄（いまいくみお）さん

韓日またに医療活動

内科の医師。日本駐在の韓国人商社員や留学生、それに在日韓国人一世ら日本語をうまく話せない韓国人の患者が、人づてにこの人のところにやってくる。韓国語が話せるからだ。

「言葉はところ、自分の意志が相手にうまく伝わらないと、イライラするでしょう。それが病気のときはなおさらで、不安になるものです」

言葉がで通ないために、体調が悪くても医者にも行かず、危うく命を落としそうになった韓国人を救ったことも多い。

北里大学在学中、関大で研修するため来日した韓国人医師の助手を半年ほど務めた。

「医者になったら韓国のために何かやってくれないか」

その医師のことばに心を動かされた。医者の招待で初めて韓国を訪れ、韓国人の「素朴な人柄」に触れ、あらゆるものが身近に感じられた。韓国も自分の医療活動の場にしよう、と決心したのはそのときだ。

帰国後すぐに韓国語を習い始めた。医師になって初めて勤めた横浜の聖マリアンナ病院では、積極的に韓国人の患者を診察し、少しでも患者の慰めになればと、韓国語で話しかけた。

韓国との医学的なつながりがほしくて、八四年から四年間、聖世大に私費留学。下宿で自炊をしながら韓国社会をハダで感じつつ、大学院では公衆衛生について勉強した。先月、留学から帰ってきたばかりだ。

当面やりたいことは、韓国人留学生や在日ビジネスマン、一時的に日本で働いている韓国人の健康管理。「病気になっても手遅れにならないように。相談してくれれば手を尽くします。われわれ日本人が韓国に行って、向こうでお世話になることもあるでしょう。だから、日本ではわれわれが韓国人のお世話をするのは当然です。健康で帰国してほしいですから」

聖世大に私費留学。下宿で自炊をしながら韓国社会をハダで感じつつ、大学院では公衆衛生について勉強した。先月、留学から帰ってきたばかりだ。

当面やりたいことは、韓国人留学生や在日ビジネスマン、一時的に日本で働いている韓国人の健康管理。「病気になっても手遅れにならないように。相談してくれれば手を尽くします。われわれ日本人が韓国に行って、向こうでお世話になることもあるでしょう。だから、日本ではわれわれが韓国人のお世話をするのは当然です。健康で帰国してほしいですから」

汗かきかきの熱弁

日本人の韓国語コンテスト

慶尚道なまりも飛出す

日本人が日本人のために開いた「第一回韓国語スピーチ・コンテスト」が二十五日、東京・早稲田大学内「スコットホール」で行われ、公務員、学校の先生、学生など、計二十九人が参加、聴衆百余人がつめかけた。

第一部は学習経験一年程度、二部は二年前後、三部は三年以上、と分けられており、各九人、六人、四人が参加した。一部は四分、二、三部は六分と時間制限されている上に聴衆を目前にして、汗をかきかき、手もとの原稿をチラッと盗み見しながらの熱弁だった。

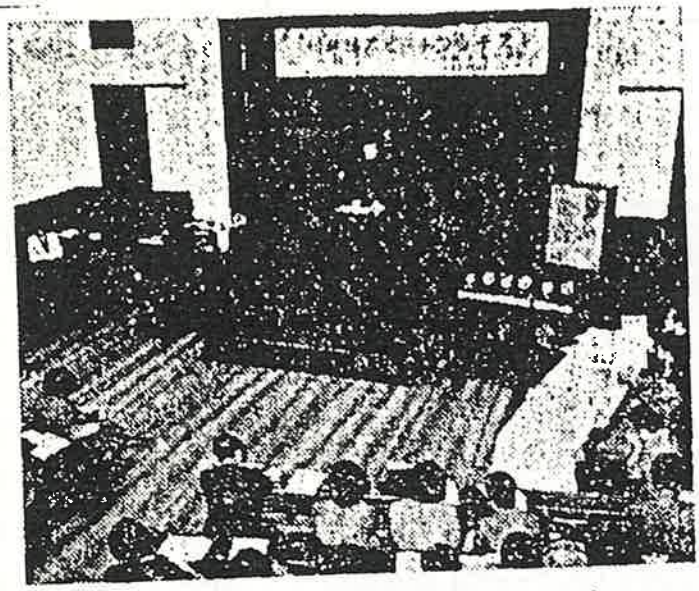
一部、二部では発音やイントネーションに難があるとはいえ、学習二年未満としてはなかなか立派なものであった。三部では、何度も訪韓している人も多く、さほどないながらも十分に通用する韓国語である。

最高熟練クラス

優勝は青年医師

三部で優勝した今井久美雄氏(三七)=聖マリアンナ医科大学病院医師=は四年前に初訪韓、以来十数回も訪韓していることから発音、内容とも充実しており、「慶尚道なまりもポイントとなり聴衆をうなせた。同氏には、優勝の栄誉のほか特別賞として早稲田大学内「スコットホール」で開いている集中講座の参加費用が贈られた。

同国の商工業担当者は「今は韓国で日本語が通じるが、これから三十年もたつと日本語が通じなくなる。今から双方で言葉を勉強する人を増やしておかないとコミュニケーションの手段がなくなってくる」と語り、このスピーチ・コンテストを恒例化していくという。第二回はことしの十月十日をメドにしている。



早月日　6月4日

日本の友達を求める就学生

川崎市　今井　久美雄（医師　39歳）

先日、東京で韓国語を習っている人たちの親睦（しんぼく）会が開かれた。埼玉県の高麗神社を参拝したあと、八十人ほどが近くの河原で焼き肉パーティーをした。私はこの集まりに韓国からの就学生を何人か誘った。その中の一人があいさつで次のようなことを言った。

「いままで日本の人とこのように話したことがありませんでした。日本語学校に行っても、日本人は先生だけで、あとはみんなよその国からの学生です。きょうは初めて思いっきり日本語を使うことができました。ぜひこの機会に学生と友達になってください。本当に日本の友達が欲しいのです」と。

神社の境内につるされた絵馬の中にも、ハングルで「友達が欲しい。日本の友達ができますように」と祈願した韓国の学生が書いたものが何枚か見られた。

麻泰愚大統領の訪日を契機に、もっと民間レベルのつき合いを、という声が聞かれるが、この学生たちの「日本人の本当の友達が欲しい」という切実な願いは何を意味するのだろう。

現在の日本には、寂しい日々を送っている就学生、留学生がどれほどいるだろうか。日本人ひとりひとりが、ほんのちょっとの心の優しさを見せてあげることができたらと思う。

埼玉

河北新報 夕刊　平成2年(1990年)4月16日（月曜日）

随想

継続こそ力なり

三好彰

カット・斎藤優子

素手で牛を殴り殺す空手家が実在することを知ったのは一九七二年、私が二十二歳の時だった。それまでマーラーのシンフォニーに熱中し、ヘッセの「荒野の狼」に魂を奪われていた私はスポーツが全く駄目で、いわゆる「運痴」だった。

そんな私がこの空手家・大山倍達の偉業に魅せられ、その年齢で空手を始めることにしたのだ。氏の流派は極真空手と呼ばれ最も厳しい稽古（けいこ）内容で知られていたから、運痴の私はついて行くだけで死ぬような思いをした。それどころか当時盛岡に住んでいた私は、稽古のためにだって夏休み等を利用して上京しなければならなかった。

こんなスケジュールで本部道場の稽古に参加していると、あまりのきつさに本当に血尿が出る。初めて血尿を見た時、私は感心のあまりしばらく便器の中を覗（のぞ）き込んでいたものだ。

こんなつらい思いはしかし、後になって大変役に立つ。なにより、体力がついた。医者という職業は体力を要求される。私がこれまでそれなりの業績を成し遂げ得て来たのも、もちろん空手で培われた体力に因（よ）るものだ。

それに、空手を通じて多くの人と出会うことができた。数年前から極真の宮城県支部長を任されることとなった私は、支部大会を開催することによって医者としての生活からだけでは得られないさまざまの人脈を得た。殊に来年の支部大会は宮城・ブラジル友好協会の協力により、ブラジル選手団との国際試合になることが予想されている。私の提唱している真の国際交流が、こんな所からも実現して行きそうだ。

だけど私が空手から教わった最も大きなことは、もしかしたら「継続こそ力なり」という言葉だったのかも知れない。あらゆるものが急速に変化して行く現代にあって、一つのことを継続するのには努力が要る。研究面においても、それは同様である。しかしこの言葉によって継続の意味を教えられた私は、研究面で「止（や）めないこと」がどれ程大きな結果を産むのか、身に染みて知ることとなる。表面的な変化を遂げるものは、いかにもはでに見える。しかしそれらは、結果的に一切実を結ばない。その時結実しているのは、倦（う）まずに続けられた努力の結果だけなのだ。

空手などの運動から何を学ぶか、それは人それぞれだろう。しかし、人が生きる際の変わらぬ真実だけは汲（く）み取って欲しいと思う。

例えば「継続こそ力なり」のような。

（三好耳鼻咽喉科病院院長）

カット・斎藤優子

随想

人々を幸せに

三好彰

「我々は共通のゴールを目指しているのだと思います。人々を幸せにするという」。そんな手紙をもらった。南京大学耳鼻咽喉科の卜助教授からである。

助教授と私、そして同大学耳鼻咽喉科殷教授は、一昨年スイスのモントルーで開かれた第三回国際難聴者会議で初めて出会った。そしてお互いの帰国後、活発な学術交流が始まった。それは、この手紙からも分かるようにお互いの業績と人間性に対する深い尊敬の念のこもったものであった。

手紙による交流は、やがて相互の未知の現場に対する憧(あこが)れとなった。私は殷教授から、ぜひ仙台へ行きたいとしたためられた手紙を受け取る。私は早速、殷教授の全難聴(難聴者の福祉団体)全国大会における三笠宮さまとの昼食会への参加や、日本各地の私と親しい教授達との交流を企画し、仙台へ招いた。教授は昨年十一月の初め、南京から上海まで徹夜で汽車に乗り、成田から仙台駅に降り立った。

教授は全難聴の大会で三笠宮さまの講演を聴き、東北大をはじめ旭川医大や札幌医大そして和歌山医大や名古屋市大の耳鼻科学教室を訪れ、学術交流をした。交流はそれだけではなかった。仙台市内で菅野東北大名誉教授が管理する中国人学生のための寮・恩源寮をも教授は訪れ、学生達との心の交流も深めた。お陰で日本に着いたばかりで言葉が分からず、ホームシックになりかけていた留学生の奥さんが元気を取り戻した。

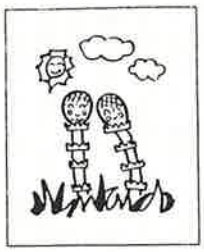
教授は私の病院では耳の手術を見学したり、最近多くなった小児の心因性難聴に対する箱庭療法を学んだ。私も教授から、鼻アレルギーに関するさまざまの知識を教えてもらった。

さらに私は教授から話を聞き、いまだに中国では中耳炎から難聴に発展してしまう症例の多い事を知った。教授の帰国間際、私は最近日本で開発されたばかりの中耳炎のための点耳薬ホスミシンSを、製作した明治製菓の協力で教授にプレゼントした。喜んだ教授は「この薬は私個人ではなく、中耳炎で悩む全ての中国人への贈り物だと思います。効果を確認して、論文として発表するつもりです」と言い残し、クリスマスの日に帰国した。

教授の好意で今度は、この秋に私が中国を訪れることになりそうだ。南京大学で、講義と耳の手術の指導をするために。卜助教授だって、近いうちに仙台を訪れてくれるはずだ。なぜなら我々は共通のゴールを目指しているのだから。そう、人々を幸せにするという。

(三好耳鼻咽喉科病院院長)

河北新報 夕刊　平成2年(1990年)3月19日（月曜日）



カット・津野千寿留

随想

かっぱの太ちゃん

三好彰

太ちゃんは生まれた時から目が青かった。髪の毛の一部も白かった。誕生直後の臨床診断名は、ワールデンブルグ症候群であった。

生後四カ月の時、昭和大学耳鼻科で彼は難聴であることを告げられる。両親を困惑させたのは、それと前後する父親の仙台への転勤命令であった。初めて授かった子が訳の分からない病気を持ち、だれ一人知る人のいない仙台に住まねばならないとしたら…。いっそ主治医のいる東京に彼と母親を残して行こうかとさえ、父親は考えた。しかし、母親一人につらい思いをさせてはならないとの思いやりが父親に決断させた。ともに仙台に住み、ともに障害を担おうと。

こうして太ちゃんは、私の前に現れた。生後わずか半年の彼とその母親を見た時、私は最初に考えた。この親子はどんなに不安な気持ちで毎日を過ごしているのだろうか、と。

私はその場で難聴児を持つ親の会会長に電話を入れ、直ちに太ちゃん親子に連絡を取り日常生活上の相談に乗ってくれるよう、依頼した。幸い、親の会からのアプローチは成功した。太ちゃんを普通の子と同じに育てよう、そう心に決めた両親は親の会役員としても活動を開始する。

それだけではない。難聴児は危険だからと敬遠しがちな水泳に、太ちゃん親子は挑戦したのだ。彼のあだ名は「かっぱの太ちゃん」。その名の通り泳ぎの上達した彼はスクールでも人気者となり、親子の地域社会への溶け込みも進んだ。難聴に対する訓練の結果、言葉の発達も良好となった。もっとも私のことを「みよしテンテー」と呼びはするのだが。

そしてある日、太ちゃんの父親に再び東京への転勤命令が下った。でも太ちゃんと私とは、もう本当のお友達だ。お互いのことを決して忘れはしない。

一般に、この症候群のような珍しい疾患の症例は、医療機関で研究対象としてのみ扱われがちだ。しかし人間としての症例本人及びその家族は、疾患とそれに基づく障害を担いながら生きていかねばならない存在である。将来、医学と医療がより人間的になっていかねばならないとしたら、症例と家族の人格を考えたこのようなケアも必要ではなかろうか。

それにしても私のそんな思いの背景には、太ちゃんの父親からのこんな一言があるのかもしれない。「大造は今夜も三好先生から頂いたミニ・カーを抱いて寝ています。〝みよしテンテー〟と寝言を言いながら」

（三好耳鼻咽喉科病院院長）

カット・津野千寿留

「遣(や)ってしまったからなあ」。

前宮城県知事・山本壮一郎氏は、こうつぶやいた。宮城・ブラジル友好協会設立のため、会長を山本氏に依頼しに行ったその席のことである。

戦後日本が貧しく、海外に夢をはせねばならなかった時期があった。ブラジルへ移住することも彼ら自身の将来のためであると期待して、当時の山本氏は喜んでいたのだろう。移住民もその期待にこたえるべく地道な努力を続けた。報われなかった努力も多かった。しかし、最終的に彼らの努力は、立派な日系人社会として結実した。それ

随想

宮城・ブラジル友好協会 その使命(下)

三好彰

なりの蓄財もできた。ところが、その彼らを襲ったのが猛烈なインフレである。彼らの蓄財はあっという間に紙切れ同然となる。皮肉なことに、その間に故国日本は世界一の経済大国になっていた。

移住民一世は必死で働き、それでも移住先の社会に受け入れられず事故死したり、中には自殺した者さえいた。それなのに自分たちが後にした日本は、独り繁栄を続けている。今では日系ブラジル人二世・三世は、一世をブラジルに残し日本に出稼ぎに来てしまう。この一世たちの悲しい歴史を、山本氏は思い起こしたのだろう。いや、一瞬自己を責めさえしたかもしれない。

しかし、それだけではない。あれは国の棄(き)民政策ではなかったのか。そもそも日本国家のブラジル移民政策に対して疑いの目を向ける、そんな指摘も現地の日系人一世の間でなされている。マラリアによって壊滅的な打撃を受けた幾多の植民地の悲劇だって、日本の国家がその気になっていれば防げたはずだよ、マラリアに関する知識はその当時皆持っていたのだから、と。

確かに当初民間の会社によって開始されたブラジル移民に関しては、国の怠慢を否定し切れない。その会社は実際にありもしないバラ色の生活の夢を移住民に与え、彼らを厳しい現実の前での惨めな挫折の中に放置した。国家は当時それを黙認していたも同然だったし、その後も日系人に対し特別温かい手を差し伸べていたかどうか、やはり疑問だ。棄てられたのではないか、と一世たちが疑ったとしてだれがそれを否定できよう。

そして今、日系二世・三世がありもしない日本からのバラ色の夢の前にさらされている。われわれは日系一世をブラジルに棄て、二世・三世を日本に棄てようというのだろうか。

歴史を繰り返させてはならない。決して!

(三好耳鼻咽喉科病院院長)

留学生∞ABK∞日本人　　1990年6月10日発行　第28号

知友会通信
CHIYU KAI TSUSHIN

アジア医師連絡協議会

外国人留学生医療ネットワーク設立のお知らせ

アジア医師連絡協議会(Associstion of Medical Doctors for Asia 以下AMDA)とは、1970年代のカンボジアでの政変をきっかけに大量の難民が発生した際に難民キャンプにかけつけた当時の医学部学生を中心に10年前につくられた政治的・宗教的に偏よりのない組織であり、医療を通じてアジア各国と相互理解を図り、アジアに恒久的平和をもたらすことをその目的としております。現在は日本の他に台湾；韓国；香港；フィリピン；タイ；マレーシア；インドネシア；インド；パキスタン；バングラデシュ；スリランカに支部があり、若い医師が各々の国の医療問題に取り組んでおります。

日本には平成2年1月現在、約90万人の外国人登録証を持った外国人の方々が生活し、さらに外国人登録証を持たない短期滞在の方々が10万人以上いると推定されています。国際化が叫ばれ、これだけ多くの外国人の方々が住んでいるにもかかわらず、言語の不自由さ、経済的問題、社会習慣；文化の違いなどから充分な医療を受けることのできない外国人が多数いらっしゃいます。我々AMDA日本はその活動の一環として、在日外国人留学生が基本的人権にのっとった健康な生活を送れるように医療面を支援するネットワーク作りに取り組んで参りましたがようやくスタートできることになりましたのでここにお知らせいたします。

小林国際クリニック：小林米幸

Phone　0462−63−1380又は63−0919

外国人留学生担当Dr；ナイーム（東京大学医学部第2外科学教室）（AMDAバングラデッシュ）

＜参加施設＞

小林国際クリニック：神奈川県大和市西鶴間3−5−6−11　院長：小林米幸

英語；仏語；カンボジア語；ベトナム語：北京語；広東語；潮州語：韓国語以上通訳あり。ラオス語電話で通訳依頼可

菅波内科医院：岡山市楢津310−1　院長：菅波　茂

英語通訳あり。ヒンズー語；ウルドゥ語；北京語；広東語、電話にて通訳依頼可

沖縄セントラル病院：沖縄県那覇市与儀1−26−6　院長：大仲良一　Phone　0988−54−5511

英語；スペイン語；ポルトガル語；北京語；台湾語通訳あり

以上参加施設全体で11ケ国語通訳可能

参加施設への協力機関又は個人でさらに3ケ国語通訳可能

＜方法＞

参加施設における通訳、電話を利用しての相互通訳の利用、AMDAメンバーその他の医療機関の通訳の利用

AMDA事務局　〒701−12 岡山県岡山市楢津310−1
菅波内科医院：菅波　茂

Phone　0862−84−7676

ネットワーク事務局　〒242 神奈川県大和市西鶴間3−5−6−110

皆様のお力をおかりして私達のネットワークを広く知っていただき、ご利用していただきたいと思います。

112125 KW091
GEN:Medical-Foreigners:
Foreign Residents Offered Easy Access to Medical Services+

OKAYAMA, May 11 Kyodo - Foreign residents in Japan who are cut off from medical services because of language barriers and relatively high costs can now receive treatment easily -- at least at three hospitals.

Staffed with trainee doctors and nurses from overseas, especially other Asian countries, the three hospitals in question are welcoming such needy foreign residents.

Altogether a total of 12 languages, ranging from Vietnamese, Pakistani, Indian and Chinese to Laotian and Cambodian, as well as English, French, Spanish and Portuguese, are available there, and the medical bills of foreigners in financial straits can be deferred by special arrangement.

The three medical facilities offering the special services are Suganami Clinic in Okayama, Kobayashi International Clinic in Yamato, Kanagawa Prefecture, and Okinawa Central Hospital in Okinawa.

Many foreign nationals living in the country apparently hesitate to see doctors because they cannot speak Japanese and face difficulties in making their conditions understood. Moreover, medical bills are high compared with those in their home countries, according to the hospitals.

This means the foreigners' illnesses are often allowed to worsen without treatment, the hospitals say.

In the case of the increasing numbers of foreigners studying in the country in recent years, 24 percent of medical bills are shouldered under the national health insurance system if they subscribe to the medical policy.

But the reimbursements come months after treatment. Meanwhile, the students are out of pocket.

The three medical institutions plan to expand the medical networks for the sake of such foreign residents, asking other hospitals and clinics throughout the country to join in, the officials said.

==Kyodo

7/3 J.T. (18)

Foreign residents get easy access, deferred billing at three hospitals

OKAYAMA (Kyodo) Foreign residents in Japan who are cut off from medical services because of language barriers or high costs can now receive treatment easily — at least at three hospitals.

Staffed with trainee doctors and nurses from overseas, especially other Asian countries, the hospitals are welcoming needy foreign residents.

Altogether, a total of 12 languages, ranging from Vietnamese, Pakistani, Indian and Chinese to Laotian and Cambodian, as well as English, French, Spanish and Portuguese, are available, and the medical bills of foreigners in financial straits can be deferred by special arrangement.

The three medical facilities are Suganami Clinic in Okayama, Kobayashi International Clinic in Yamato, Kanagawa Prefecture, and Okinawa Central Hospital in Okinawa.

Many foreign nationals living here apparently hesitate to see doctors because they cannot speak Japanese and face difficulties in making their conditions understood. Moreover, medical bills are often high compared with those in their home countries.

As a result, foreigners' illnesses are often allowed to worsen without treatment, officials at the hospitals say.

Another problem is that reimbursement to foreign students for medical bills shouldered under the national health insurance system often comes months after treatment.

The three medical institutions plan to expand the network and ask other hospitals and clinics throughout the country to join in, officials said.

Few AMDA-Bangladesh members had an opportunity to meet in Tokyo in last April, 1990. At that time Dr. Nayeem, the Regional Co-ordinator of AMDA-Bangladesh has arranged a regional meeting to discuss on some important agendas. The following is the minuits of the regional meeting of AMDA-Bangladesh.

AMDA-Bangladesh regional Meeting

April 17, 1990, Tokyo, JAPAN

Agenda:

1. Recruitment of new members and finalizing the membership list for the 7th AMDA annual conferance.
2. To discuss the probability of establishing a permanent office at Dhaka, Bangladesh.
3. To discuss on the minutes of the 6th AMDA conferance and the 1st AMDA Summit Meeting.
4. To discuss on the coming AMDA annual conferance in Jakarta, Indonesia.

Members present:

1. Dr. Nayeem, S. A. (Tokyo University)
2. Dr. S. A. Morshed (Kagawa Medical College)
3. Dr. Mahfuzur Rahman K. C. (Kagawa Medical College)
4. Dr. S. Alimuzzaman (Nihon University)

5. Dr. Aminur Rashid Minu (Tokyo Medical and Dental University)

6. Dr. Monjurul Haq (Osaka University)

The meeting was started at Nayeem's residence at 4 p.m. on April 17, 1990 and some resolutions were taken after a long discussion

Gist of discussion and resolutions:

Agenda 1.

AMDA-Bangladesh has six members who registered themselves in the last AMDA annual conference in Osaka. Due to increased interest of many doctors from Bangladesh about AMDA and evaluating some requests for membership, a resolution has been taken to include seven new members. AMDA-Bangladesh thinks that it will help the organization to be organized more and to take active participation in all AMDA-International activities.

Agenda 2.

Every present member has agreed that, since AMDA Bangladesh has formed and organized by the Bangladeshi doctors staying in Japan for study purpose presently, its activity in Bangladesh is limited. But AMDA Bangladesh can make a very good communication and better understanding between its members and other Asian friends to work together in

different AMDA projects even being based in Japan. So discussing the feasibility of having a permanent office at Dhaka, all present members agreed that it will be rather difficult to maintain an office at Dhaka where there is no member at present. So a decision was taken to run the organization from Japan until a considerable number of members go back to Bangladesh. The regional co-ordinator's address in AMDA Newsletter should be the same as now to avoid confusion and the co-ordinator shall continue the close contact with that address so that any communication in that address could not be missed.

Agenda 3.

All the present members unanimously expressed their support to all the decisions and resolutions taken in the last AMDA 6th annual conference and 1st AMDA summit, after going through all the minutes of both the meetings from the copies supplied.

They also expressed a regret for not being participated in the 1st summit meeting.

Agenda 4.

All the members are eager to join the 7th AMDA annual conference but due to some unfavorable condition, especially economic, they feel very sorry not to be able to join the meeting. Only Nayeem will participate and represent the AMDA-Bangladesh in the conference.

ASSOCIATION OF MEDICAL DOCTORS FOR ASIA - BANGLADESH

(AMDA-Bangladesh)

The updated membership list (name and present institution of affiliation):

1. Dr. Nayeem, Sarder Abdun (University of Tokyo, Japan), regional Co-Ordinator.
2. Dr. Morshed, A. M. (Kagawa Medical College, Japan)
3. Dr. Faisal A. Muazzam (University of Ryukyus, Okinawa, Japan)
4. Dr. Mokhlesur Rahman Bhuiya (Nagoya University, Japan)
5. Dr. Mahfuzur Rahman K. C. (Kagawa Medical college)
6. Dr. Shushovan Chakrabortty (Kobe University, Japan)
7. Dr. Ishtiaque H. Mohiuddin (University of Kyoto, Japan)
8. Dr. Syed Shamsuddin (Nagasaki University, Japan)
9. Dr. Zonaid Shafiq (Kyushu University, Japan)
10. Dr. S. Alimuzzaman (Nihon University, Japan)
11. Dr. Aminur Rashid Minu (Tokyo Medical and Dental University, Japan)
12. Dr. Lutful Aziz (Okayama University, Japan)
13. Dr. Monjurul Haque (Osaka University, Japan)

In addition the members express their wish to get the AMDA Newsletter regularly. They also wish every success of the coming conference and express their best regards to all AMDA members and the organizer of the conference.